

「リゼットの みどりのくつした」

ある ぴかぴかに はれた^ひ日

リゼットは おさんぽに でかけました。

あるきはじめて すぐ、リゼットは くつしたを かたっぽ^み 見つけました。

かわいい みどりいろの くつした。

「ラッキー！」 リゼットは おもいました。

「こんなに かわいいくつした、めったに 見つけられないもん！」

リゼットは そのくつしたをはいて、ごきげんで おさんぽの つづきを はじめました。

するとすぐに、トムキャットと ティムキャットに でくわしました。

この ねこのきょうだいは、リゼットを からかうのが だいすき。

「みてみて！ みつけたの！」 リゼットは とくいになって いいました。

「くつした かたっぽだけ？ ばかだな、リゼット。 もうかたっぽは？

くつしたは ^{ふた}二つで^{いっそく}一足って しらないのかい？」

「ああ、そっか。」 リゼットは いいました。

「くつしたは ^{ふた}二つで^{いっそく}一足よね。もうかたっぽを さがさなきゃ。」

リゼットは いちばんたかい ^き木に のぼりました。

そこからは なんでも^み見えました。でもざんねん。

どんなに ^め目を^{おお}大きく ^みみひらいても、くつしたのかげさえ ^み見つかりません。

「わかった！」 リゼットは いいました。「きっと うみに おちたんだ。」

リゼットは ^き木をおりると はまべへ いっちょくせん。

リゼットは つめたい^{みず}水に どぼんと あたまを つっこみました。

ちょうど そこに さかなさんが やってきました。

もしかして てつだってくれるかな？

「こんにちは、さかなさん。くつしたなんて ^み見なかった？」

「^み見てないね。」と さかなさん。「でも^み見てよ、すっごく^{おお}大きなコーヒーポットと

ちいさな^みまでを ^み見つけたんだ。^{みず}水のなかに おちてくるものって ^{ぜんぶ}ぜんぶ

とんでもなく すてきだよね！」

「そうね。」 リゼットは ためいきをつきました。

「でも、あたしが さがしているのは くつしたなの。」

リゼットは がっかり。おうちに かえります。

「あら、そんな かなしそうなかおして。 どうしたの、リゼットちゃん？」

おかあさんが ききました。

「くつした かたっぽ みつけたの。」 リゼットは こたえました。

「でも かたっぽじゃだめ。 ^{ふた}二つなきゃ いけないの。」

「それは そうね。」 おかあさんは いいました。

「くつしたは ^{ふた}二つで^{いっそく}一足だもの。 くつと おんなじ。

ほら、それ あらうから かしてごらん。

みちに おちてた くつしたなんて はいちゃだめよ。 きたないでしょ。」

リゼットは すわって くつしたが かわくのを まちました。

「あれって きみのぼうし？」

リゼットが ふりかえりると ともだちの バートがいました。

「あれは ぼうしじゃないの。」 リゼットは おしえました。 「くつしただよ。」

「そうなんだ。」 バートはいいました。

「とにかく ぼく、あんなぼうしが すごく ほしかったんだ。

かぶってみてもいい？」

「どうぞ。」

リゼットは ふきだして おおわらい。

「あたしのくつした あなたに よくにあってる！」

「ほらね、これ とってもいい ぼうしになるでしょ。」と パートは いいました。

「ほんとだ。もし^{ふた}二つあったら あなたに かたっぽ あげられたのに。」リゼットは
いいました。

トムキャットと ティムキャットは いえのまわりを ぬきあし さしあしで
うろうろ。

「ピンポン！」ティムキャットが おおごえで いいました。

「リゼット。ほら見ろよ。おまえのくつした、もうかたっぽ みつけたぞ！」

「どこにあったの？」リゼットは たずねました。

でも ねこのきょうだいは しらんぷり。

「ここまで おいで！ とりにおいで！」と さけびながら にげていきます。

リゼットと パートも かけだして ひっしに おいかけます。

「やれやれ、あいつら ちいさいけど あしは はやいよな。」

トムキャットは はあはあしながら いいました。

「でも くつしたは ぜったい わたさないけどね。」とティムキャット。

「ぼちゃん、っと！」

リゼットとバートが いきを きらして やってきました。

「さあ、 はやく くつした ちょうだい。」 リゼットは いいました。

「なんのこと？ くつしたなんて もう もってないよ。 ほらな？

どこかに とんでいっちゃった。」

バートが リゼットの そでをひっぱって いいました。

「もう わすれよう。 あいつらは いじわるで うそつきだ。

くつしたが とべるわけないよ。」

「ひどいよね。」 リゼットは いいました。

「もうこれで ふたつめのぼうしは てに はいらなく なっちゃった。

でも あたしのを もうすこしだけ かぶっててもいいよ。

おうちに ついたときに かえしてくれればいいから。」

「やさしいね。」 バートは とても ^{ちい}小さなこえで いいました。

おうちに かえると なんとびっくり。

リゼットのママが あたらしい くつしたを あんでくれていました。

みどりいろの くつした。 リゼットのと そっくりです。

リゼットは うれしくて とびあがり、ママに ぎゅっと だきつきました。

「あなたも それを あたまに かぶるつもりなの？ パートみたいに？」と
ママは ききました。

「もちろん！」 リゼットは ^め目をかがやかせました。

「これで あたしたち ふたりとも ぼうしがあるんだもん！」

パートは うれしくて おどりはじめました。

もう ねるじかん。 パートは おうちに かえってしまいました。

リゼットは ぼうしをかぶって ねるつもり。

リゼットは パートのことを かんがえました。

パートも ぼうしをかぶって ねむるんだらうな。

せったい そう。 リゼットには わかります。

でも いちばん しあわせなよるを すごしていたのは さかなさんでした。

さかなさんは ちいさなくまでと おおきなコーヒーポット、おまけに

ねごこちのよい ねぶくろまでみつけて とっても うれしかったのです。